

大平さんの追憶

法眼晋作

大平さんの下で、私は二回にわたって働いた経験があります。第一次外務大臣時代は欧亜局長として、次いで第二次の時代は次官でありました。

大平さんは外見の風貌とは異なり、その人となりは細心にして緻密、重厚かつ誠実の人でありました。しかしながら、大平さんと私を結びつけたものは、仕事の上での関係というよりも、双方の長男が、約二カ月の間隔をおいてこの世を去るといふ、不幸に見舞われたとき以来のことでありました。

世にいう同病相憐れむとでもいうのでしょうか。長男俊作が十七年前の六月、ベルリンで自殺をしたのですが、突然の出来事に呆然としていた私ども夫婦に、大平さんとご家族から親切な慰めと激励のお言葉をいただいたことは、いまもって忘れられぬところです。ところが、それから約二カ月たって、大平さんのご長男正樹君が、当時の医学では原因の判らない難病のためご他界されたのです。報らせをうけて馳せつけ、ご豊前に合掌し、お悔みを申し上げたとき、大平夫人が私に向って、正樹はいま頃は俊作さんに会っていきましょうとおっしゃったことは、いまでも私の耳に残っているのです。この二人は、この出来事の一年前にベルリンで意気投合していました。一九六三年夏の末、大平大臣が西欧六カ国を公式訪問されましたが、正樹君も同行したので、私ども随員も自然と同君と親しくなったのですが、まことに立派な青年で、将来の大器を予測させる人物でありました。私は大平さんはよい跡つぎがいるなと思つたものでした。それだけに大平さんご夫妻のお歎きは一人であると推測申し

上げておりました。爾來、大平さんは逐年政治の上層へと進まれ、次々と要職を歴任されましたが、恐らくご多忙の裡にも、正樹君のことを思い出さぬ日はなかったのでしょうか。

大平総理の葬式の日、告別式がすんで、ご出棺の直前、喪主の裕さんが挨拶をされましたが、そのなかに故人は天国で兄正樹に会っているであろうとの一句があったことは、私たちにとりまことに印象的でありました。

現在の政治の世界では、どこの国でも内政外交の重責が、総理大臣に集中する傾向が顕著であります。国内、国外を間断なく駆け回り、重要会談に次ぐ会談で陣頭指揮に当るご心労は、言語に絶するものがあります。国内、大平さんの場合は、それに加えて両院の同時選挙が重なって、さしもの頑健なお身体も、いつの間にか蝕まれ尽きてしまったのでしょうか。何とも痛ましい限りです。

昨年五月、華国鋒首相来日の際、総理官邸の歓迎夕食会でお目にかかったのが最後でありましたが、私から毎日一時間くらいは余計に睡眠されるとよいのですがと申し上げたところ、いやそれがすぐ目が覚めてね、困るのだよ、と申されました。そのお答えには何ともいえぬ響きがあったと感じたのは、私の思いなしかも分りませぬ。大平さんの安らかなご冥福を心からお祈りしています。

(元外務次官)